

ヘーゲルの「概念实在論」の検証 ——「形而上学」を置き換える「論理学」——

岡崎 秀二郎

1. はじめに

長らくヘーゲル哲学の解釈史では、ヘーゲルが自らの哲学を通じて何らかの「形而上学」を提示しているという見方が、ほぼ自明の前提とされ続けてきた¹。

それに対し、主に近年の英米圏で展開されてきたヘーゲル哲学の再解釈の流れの中では、むしろ言語分析に基づく非形而上学的（デフレ的）解釈が一定の支持を集めている²。それと同時にこの流れに呼応する形で、ヘーゲル哲学と形而上学をめぐる関係性は、解釈者らにとって無視しえない、新たな論争点の一つを形成するに至っている。そこでは、ヘーゲルの哲学、とりわけその「論理学」が、現代哲学の枠組みを踏まえてもなお「形而上学」と重なると言えるのか、あるいはそれはどのような意味の「形而上学」と重なると言えるのかという論点をめぐって、改めて議論が交わされている状況にある。

とはいえ、こうした文脈の中でヘーゲル哲学の形而上学的側面を擁護しようとする解釈者たちは、ヘーゲルが一つのテーゼを提唱していると思なす点では、概ね同じ立場を共有している。それはすなわち、〈概念が世界の内に客観的に存在している〉というテーゼであり、一言で言えばそれを擁護する方針は、「概念实在論 conceptual realism」と呼びならわされている。もともとスターン（Stern 2009）によって提唱されたこの枠組みは、上述の非-形而上学的解釈に対峙する中であって、改めてヘーゲル的な「観念論」を特徴づける観点として導入されたものであった。つまり、ヘーゲル哲学は確かに「絶対的観念論」という立場を標榜するものの、それはあらゆる客観的实在を思考や心の作用に還元する「唯心論的観念論 mentalistic idealism」ではなく、むしろ思考規定が世界の内で客観的に見出されることを主張する、「实在論」を含意する。

本稿は以上の問題状況に鑑みて、ヘーゲル論理学がもつ形而上学的な含意を、この「概念实在論」の観点から明らかにすることを試みる。以下ではまず、解釈者が総じて依拠している『エンツュクロペディー』「予備概念」の記述を参照点として、その解釈方針に沿って形作られた「概念实在論」の基本的な論争の次元を確認する（第2節）。

¹ 例えば、ヘーゲル論理学と形而上学の一致を指摘する近年の日本の研究としては、以下を参照（cf. 山口 2019, 26-28）。

² 非形而上学的な方針を取る解釈者には、K. ハルトマン、ピンカード、ピピンらが挙げられるが、その内でも何を形而上学と見るかには幅がある（cf. Magee 2016, 44）。ラウは論理学の形而上学化に抗してデフレ的解釈を提示している（cf. Lau 2016, 27f.）。裕はこの方針の上で、強い实在論（存在論）を含意しない「意味論」としてヘーゲルの概念实在論を解している（cf. 裕 2024, 3-9）。

本稿はその論争の枠組みを踏まえた上で、「概念実在論」が従来の形而上学的解釈に対して、いかなる代替方針を提示しうるのかを考察する。さしあたりその方針は、「観念論」対「実在論」の単純な二項対立を越えた第三の選択肢を提示するものとして位置づけられるが、本稿はより具体的に、この文脈において改めてヘーゲル的な「概念」の実在論を特徴付ける二つの方針として、ブランダムとマクダウェルによる、『精神現象学』（以下『現象学』）の「自己意識」論をめぐる解釈を再構成することを試みる。その両者は確かに、セラーズの「理由の空間」に基づいて「所与の神話」を斥け、翻って〈概念的なものが外側の境界をもたない〉ことを示そうとする点では、同じ出発点を共有している。しかし、両者がそこで「概念実在論」という目的に到達する上で拠って立つ論拠は、そもそもいかなる種類の「観念論」をヘーゲル哲学に帰属させるのかという考察を軸にして、相容れない対照的な方向性を帯びていると考えられる。予めその方向性を述べれば、一方のブランダムには、客観的な「観念論」を前提として、形而上学的な「実在論」を相対化する方針が見られる（第3節）。それに対し他方のマクダウェルには、統覚に基づく「実在論」を前提として、「観念論」に原理的につきまとう客観性をめぐる「不安」を、先鋭化しつつ解消する方針が見られる（第4節）。

しかし同時に本稿は、「自己意識」という主体をめぐってブランダムとマクダウェルが提示するこれら二つの方針を踏まえつつ、『現象学』が『論理学』に接続するものとして提示する所謂「思弁的命題」の枠組みを再構成することを通じて、両方針が最終的にその枠組みの中で、命題の「形式」と「内容」という不可分な両側面に沿って整理することができるという見方を示す。そこから本稿は、これらの「概念実在論」を踏まえた「思弁的命題」の考察から導かれる概念の「自己運動」の内実に基づいて、従来の形而上学を置き換えうるヘーゲルの『論理学』の枠組みを結論づける（第5節）。

2. 「概念実在論」の考察の次元

2.1 『エンツュクロペディー』第24節のL-Mテーゼ

上述のように、ヘーゲルの「観念論」の特徴をめぐる近年の研究状況の中で、しばしば解釈者によって参照点として位置づけられてきたのが、「概念実在論」である。さしあたりそれは、以下の一連のテーゼを受け入れる立場を意味している³。すなわち、(i) 論理学という学は、思考の基本的構造の説明を提供する、(ii) 形而上学という学は、実在の基本的構造の説明を提供する、(iii) 論理学は形而上学と同一視される、そしてこれらの前提 (i) ～ (iii) が成り立つとき、(C) 思考と実在は同じ基本的構造を共有しなければならない。ひとまず、この一連のテーゼの結論として導かれている (C) は、一方では「観念論」のもつ基本的な側面として、思考から独立した実在の構造を否定するという主張を特徴づけている。しかし他方で (C) は同時に、観念ないし思考

³ 直近のダンフィーの整理による (cf. Dunphy 2024, 1f.)。

が实在と無関係な自立的構造をもつのではなく、むしろ思考の構造がそのまま客観的世界における实在性を伴うという、概念の「实在論」を含意している。

ではまず、こうして定義された「概念实在論」が、実際にどのような仕方でヘーゲル哲学の内に見出されると言えるのか。さしあたり、『論理学』を構成する〈客観的論理学〉と〈主観的論理学〉は、それぞれ従来の「形而上学」に見られた「存在 *Ens*」の構造と、その構造を説明可能にする「思考規定」としての「概念」を主題化している。この点で、上記の (i) と (ii) の「論理学」と「形而上学」の規定が、『論理学』の基礎に置かれていることに疑問の余地はない。それに対して解釈者のもとで繰り返し争われてきたのが、残る前提 (iii) に相当する、「論理学」と「形而上学」の関係である。実際にはヘーゲルの著作の中で、この関係が最も明瞭な形で提示されていると考えられるのが、『エントツクロペディー』の所謂「小論理学」の導入部に当たる箇所挿入された「予備概念」、特にその第 24 節である⁴。ヘーゲルはとりわけここで展開されていく「体系」にとって、その第一部をなす「論理学」が「形而上学」と合致するということを明示する、次のテーゼ（以下、L-M テーゼと略記）を提唱している。

論理学は〔…〕形而上学と合致する。形而上学とは、思想において把握された物の学であり、思想とは物の本質を表現するものと思われていたのだからである。〔…〕思想は物について一つの概念 (*Begriff*) を作ろうと努めるのであるが、その場合この概念は（したがってまた概念の最も直接的な形式である判断と推論も）、物に疎遠で外的であるような諸規定と諸関係とから成り立っているというようなことは、ありえない。(GW20, §24)

この一節が定式化する「概念」観は、確かに先に見た概念实在論の内実には適合している。すなわち、「形而上学」がまずもって「物の本質」そのものを把握する学であるのに対し、「論理学」はそれを把握する思考の形式たる「判断」や「推論」を主題化する。その結果、「論理学」が明らかにする「思考規定」を担う「概念」は、それ自体が「形而上学」の対象となる「物」の本質に対して疎遠ではありえない。この点で、「形而上学」と「論理学」は、むしろ合致するとヘーゲルは主張しているということになる。

2.2 ピピンに対するスターンの争点

以上の一節を見る限りでは、ヘーゲル論理学の「形而上学」に対する忠誠は疑いようがない。確かにスターンが同節を基準として「概念实在論」の観点を提示した時、そこで先行していた論点は、ヘーゲルが「形而上学」から帰結する「实在論」に与しているかどうかという、比較的素朴なものであった。すなわち、一方でスターンが自

⁴ 同節は諸家によって、「形而上学」を置き換えるヘーゲル「論理学」のスタンスを要約したものとして、度々位置づけられている (cf. Houlgate 2022, 114; Ficara 2020, 22)。とりわけアルズナウアーは、同節に付された「追加」を挙げている (cf. Alznauer 2023, 103)。

らに対峙させるピピンの解釈に立てば、ヘーゲルが唱える観念論は、あくまで批判的転回によって伝統的形而上学を超克した、「カント的観念論」の延長線上で理解されねばならない (cf. Stern 2009, 46)。仮に、この所謂ポスト・カント的解釈によって際立たせられる側面に忠実であろうとすれば、「物」自体が認識されることを主張する形而上学に、ヘーゲル哲学が合流していると想定することはできない。だが他方で、スターンの立場から見れば、このカント的観念論は結局、懐疑主義ないし非実在論に関与することを否定できない。仮にそうだとすれば、上記の「形而上学」と「論理学」の合致というテーゼを、ヘーゲルが「何らかの形の反-実在論」(Stern 2009, 52) にコミットした上で提示することは、そもそもありえないのではないかという疑問が生じる。

一見するとこのピピンとスターンの対立は、ヘーゲル哲学を形而上学的と見るか否かという点で、調停不可能な争点をなしている。だが両者はこの点に関して、一つの共通する方針を同時に示唆している。それはすなわち、ヘーゲルが上記の L-M テーゼを掲げる時、実際にはそのテーゼは形而上学とカント的批判哲学の対立よりも高次の観点から提示されている、という見方である。具体的に言えば、一方のピピンが強調するように、上記の第 24 節でヘーゲルが念頭に置く「形而上学」とは、あくまで論理学によって物を把握するヘーゲル自身の「新たな形而上学」の構想を意味し、そのためそれは物自体の実在を素朴に前提する、「かつての形而上学」ではない⁵。このピピンの見方は、更に進んだ「予備概念」の記述に根拠がある。というのも、そこでヘーゲルは、「客観に対する思想の態度」として哲学史に見出される典型的な立場を三つ取り上げつつ、その冒頭の〈第一の態度〉に挙げられる、客観的対象を直接把握する「かつての形而上学」(GW20, §27) が、〈第二の態度〉の内の「批判哲学」(GW20, §40) によって乗り越えられたと明確に評価しているからである。ピピンはこの観点から、ヘーゲルが結局はカントと同様に、「無批判的思考や独断主義への退行」(Pippin 2019, 356) を回避しながらも、自らの新たな形而上学を提示していると結論づけている。

しかし他方で、この問題の次元は元のスターンの議論でも無視されてはいない。つまり、確かにヘーゲルの観念論に実在論を帰属させることは、ピピンが回避しようとする「前カント的な形而上学の無責任」(Stern 2009, 60) に陥っているように見える。例えばヘーゲルは、「世界」の全体という形而上学的対象の内に、有限な対象とは異なる「絶対的存在」を認めている。だがスターンが付け加えるのは、このようにして「有限な」対象の存在を否定するヘーゲルの観念論は、実際には「客観に対する思想」の〈第三の態度〉、言い換えれば、「有限なものが絶対的なものとして措定される」(GW20, §74) というヤコービの立場に対峙する中において、その実在論を主張しているとい

⁵ Cf. Pippin 2019, 355; Dunphy 2024, 3f. とりわけピピンが抜け目なくこの文脈で注意を向けるのは、同節で用いられる、「思想とは物の本質を表現するものと思われていた galten」という、古代の「形而上学」が維持していた理解であることを強調する、過去形の表現である。

う点である。それはすなわち、「世界全体」に実在性を認めるヘーゲルの観念論は、厳密にはヤコービが自らの直接知に対峙させた、〈全ての規定は否定である *omnis determinatio est negatio*〉という標語によって知られる、スピノザ主義に基づく「全体論」に合流するものとして、初めてその位置づけが得られるということを意味する。この位置づけに即せば、ヘーゲルの観念論は、〈第一の態度〉としてのかつての形而上学と〈第二の態度〉としてのカント的観念論のいずれにも還元されえない形で、概念の「実在性」を主張しているということになる。では、こうして L-M テーゼを成立させる高次の次元において、いかにして実在論と観念論が両立させられると言えるのか。

3. 「観念論」を前提とする「概念実在論」の弁護方針

3.1 自然種の「本質主義」

本節では「概念実在論」に対する第一の弁護方針として、スターン自身によって提唱された枠組みとともに、スターンに準拠するブランダム解釈の可能性を検討する。前節で言及したように、この弁護方針は、ピピンに典型的に見られたデフレ解釈に抗する応答として現れてきた。当初この潮流の内には、ヘーゲルの観念論を「正真正銘の形而上学」を復活させるものとして解する方針が含まれていた⁶。しかし、スターンの「概念実在論」は、基本的にはそれよりもやや穏健な形而上学を志向するものとして位置づけられる⁷。すなわち、その見方はさしあたり、「類」や「種」に代表される普遍概念それ自体が実在していると思なすものとして、普遍論争のもとで唯名論に対峙させられた、実在論と呼ぶべき立場に重なっている。総じて言えばこの立場のもとでは、普遍的なものとしての「自然種」に代表される概念が、現実の客観的な秩序を与えるものとして理解されうる (cf. Stern 2009, 25f.)。例えば、我々は経験において有限な存在である一匹の「猫」に出会いはしても、無限な対象を包含する「ネコ科」そのものを目にすることはない。だがそれでも、「ネコ科」という抽象的概念は、この世界の個体を特徴づける上で必要不可欠なものとして、この世界に「実在」している。

⁶ 例えば、こうした「強固な」形而上学的方針を代表するメイカーの見方では、ヘーゲルの実在論は、その哲学体系を構成する「自然哲学」を通じて、「論理学」にとって「他なるもの」としての形而上学的存在を再構成していると解釈されている (cf. Webster 2022, 300-3)。またチェンバースは、ヘーゲルの「絶対的精神」の内に、スターンが斥けた唯心論的観念論の含意を読み込むことで、メイカーの「強固な」形而上学的解釈を、改めて擁護している (cf. Chambers 2021, 632)。この一連の系譜に鑑みると、有限な認識に先立って、「精神」の内に概念と世界との統一が成立しているとするテイラーの「一元論」的解釈や、ヘーゲルによって「理念」とも呼ばれる「絶対的否定性」の構造が、通常の有限な概念から独立した意味を持つことを主張するボウマンの「形而上学的観念論」も、「強固な」形而上学の方針に即して概念実在論を唱えるものとして位置づけることができる (cf. Wolf 2018, 335f.; Taylor 1977, 300; Bowman 2013, 32)。

⁷ 以下のスターンの「概念実在論」の位置づけは、主にチェンバースの整理に依拠する (cf. Chambers 2021, 628-30)。

ではまず、この普遍概念の理解はヘーゲル哲学の内にどのようにして読み取れるのか。クナッピクによる特徴づけに従うのであれば、実際にヘーゲルがこの意味での「概念実在論」を支持していると考えられる論拠は、とりわけ自然種に関する「本質主義」という観点から示される。すなわち、前節で言及した「予備概念」の L-M テーゼのもとでは、概念が「物の本質」を掴み取り、またそれによって「客観的思想」(GW20, §24) が認められうるということが同時に主張されている。この時ヘーゲルの念頭にある「概念」は、まずもって動物の個体に対比されるべき、「類」という自然種を意味している⁸。ただし、中世の実念論の系譜に対するヘーゲルの「概念実在論」の特異性は、この「類」概念の実在性を重視することに加え、一般に何らかの個体の内に見出される「本質的な区別は概念の契機でなければならない」(GW12, 82) という、より広義の本質主義が唱えられている点にある。つまり、我々が目にする有限な個体は、特殊な性質が変化しても持続し続けるような何らかの本質を既にそれ自身に内在させている。この観点から見れば、例えば明暗の対立をなす種々の色を含む「色彩」や、善や悪でありえる「行為」ですらも、「類」としての実在性を帯びた概念と見なされる⁹。こうして『論理学』が既に「序文」で宣言するところでは、「いかなる個々の動物も動物であるという第一のもの Prius を持つように […]、本性、固有の本質 […]、実体的なものは、事柄 Sache の概念であり、事柄自身のうちにある普遍的なものなのである」(GW21, 15)。

さしあたり以上の本質主義的な解釈は、「概念実在論」を擁護する解釈者らが共有する、最も基本的な前提の一つに位置づけられる¹⁰。ただしこの本質主義のパースペクティヴのみでは、本来スターンが提起した枠組みを特徴づけるには依然として十分ではない。上記のクナッピクに代表される解釈の焦点は、自然的対象が内在させる客観的構造に対して、普遍概念が真正な「説明」を与えうるという側面に置かれている。例えば「ネコ科」という類は、一匹の〈猫〉である個体が必然的に〈脊椎動物かつ哺乳動物かつ肉食動物等である〉といった様相論的構造を説明するために、最適なものとして導入されている¹¹。この方針には確かに、ヘーゲルの普遍概念に（実体一元論のような）必要以上の形而上学的含意を負わせることを回避する点で一貫性がある¹²。

しかし、スターンの強調点に従えば、ヘーゲルの「観念論」はより根本的に、そもそも形而上学に見られる「この類いの超越を回避する」(Stern 2009, 60) という意図を

⁸ Cf. Knappik 2016, 762f.; GW23. 1, 823.

⁹ Cf. Knappik 2016, 763; GW21, 83; GW20, §178.

¹⁰ スターンに加えて、クライネス、ウェストファルらにも同様の本質主義的解釈が見出される (cf. Wolf 2018, 337f.)。例えばスターンが自身の立場との類似性を認めるクライネスの「概念実在論」に従えば、事物が存在する際にヘーゲルが想定している「根拠（理由）」は、いずれも事物に「内在的な普遍的原理や類に類似した、内在的な概念に由来する」(Kreines 2015, 22; cf. Stern 2018, 107)。

¹¹ Cf. Knappik 2016, 761-7.

¹² クナッピク自身は、特に「類」概念の「実体」的解釈をめぐって、スターンとの相違を強調する (cf. Knappik 2016, 778, n. 29)。

前提にもっている。すなわち、有限な存在が有限な概念を通じて把握された「世界の不完全な像」が、「説明の連鎖の背進」を引き起こす時、正真正銘の形而上学では、この背進を停止して完全な説明を与えうる、普遍的で超越的な「第一原因」が想定される。しかし、むしろ「ヘーゲルの立場の狙いは、超越的な出発点を設定することで〈説明〉の背進を終わらせるのではなく、世界は一種の全体性であり、この次元では「原因」や「根拠」といった概念が適用不可能になると示すことにある」(Stern 2009, 61)¹³。言い替えれば、あくまでヘーゲルの実在的な普遍概念は、有限な実在を同じく有限な経験的世界の原因や根拠では完全に「説明」しきれないという、「否定的戦略」(Stern 2009, 61, n. 52)から導かれている。実際にヘーゲルは、「有限なもの」の「実在性」ではなく、むしろその「否定」、つまり有限者の「観念性」の内に「真理」を見出す点にこそ、観念論としての「哲学の主要命題」(GW20, §95)があると主張している。したがって、この「否定」から導かれる世界全体は、有限な存在を超越した形而上学的観点から積極的説明を与えるものではない¹⁴。その世界はむしろ説明可能性の境界の外部を認めない全体論的な統一としてあり、その限りのメタ的次元でのみ、「自立した自己実現的な構造」(Stern 2009, 60)を示しうるものとして特徴づけられる¹⁵。

3.2 ブランダム『現象学』解釈における「概念実在論」

以上のように、スターンが提示した「概念実在論」の枠組みでは、形而上学的な普遍概念の実在性が主張される一方で、当の概念がもちえる「説明可能性」は、観念論の全体論的な枠内でのみ認められうる。この文脈において、より実質的にヘーゲルの観念論を定式化することでスターンの「概念実在論」の方針を補強するものとして、『現象学』「自己意識」章に対するブランダムの解釈を位置づけることができる。

¹³ この「全体論」的観点もクライネスを含め比較的多くの解釈者が共有している側面と言える (cf. Kreines 2015, 181-98; deVries 2019, 366f.)。ただし、マクナルティが批判的に整理するように、クライネス自身はこの立場を導く上で、全体という「無制約的なもの」を求めるカントの弁証論の影響を強調しているという点でスターンとの相違がある (cf. McNulty 2022, 207-17)。

¹⁴ スターンはこの点で、ヘーゲルが〈全ての規定は否定である〉として言い表す、有限者の「観念性」に基づく「世界」の理解が、スピノザ的な一種の「無世界論」を許容しえたとしても、実体の「一元論」には還元されえないものであると結論づけている (cf. Stern 2016, 42-6)。

¹⁵ ガブリエルが整理するように、ヘーゲルの「絶対的観念論」は、経験を超越した宇宙や自然に関する実体的情報を与えているわけではないという点で、一階の形而上学から区別されたメタ形而上学として特徴づけられる (cf. Gabriel 2016, 197)。ヴォルフもまた、元々の「概念実在論」の内では、形而上学的な普遍的概念と客観的対象とのギャップを認めざるをえないという問題を踏まえ、一階の存在論的次元ではなく「理解可能性」という観点から「概念実在論」を再解釈している (cf. Wolf 2018, 339-343)。さらにヴォルフはこの観点に基づいて、形而上学に対するヘーゲルの態度を、「メタ形而上学的な非実在論」(Wolf 2024, 678)と特徴づけている。

まずもってブランダムの解釈では、『現象学』全体が関与する最も基本的な方針は、まさしく「概念実在論」に、言い換えれば、「思想のみならず、我々の知識の対象であり行為の場である非精神的な世界が、本質的に概念的な構造を有するという見解」(ST, 363)にある。さらに、スターンの着眼と同様に、ここで想定される概念的な構造は、「あらゆる規定は否定である」という、スピノザ的原理によって与えられる。つまりこの原理に従えば、ある対象にとっての本質的な性質は、それに対立する性質を排除することを介して規定される。例えば、ある物体がもつ、〈純銅である〉という規定性は、〈絶縁物質である〉という性質を排除することで成立している。このとき、それらの二つの性質が両立することは必然的に不可能であるという点で、それらは対象の実質を規定する。それに対して、例えばそれが立方体や球形等々であるという性質は、当の物体にとっては偶然的に伴われうるにすぎない。この帰結として、規定的否定を介して定まる概念的構造は、客観的对象の本質的な諸性質の実質的な両立不可能性を表すことを通じて、真理様相実在論とも呼ぶべき形而上学的な含意を帯びる。

ブランダムの見立てでは、この本質主義の方針に基づく「概念実在論」は、実際に『現象学』の「自己意識」に到達する「意識」の過程の中で一貫して機能している(cf. ST, 373)。例えばその過程の出発点にある「感覚的確信」は、「今は夜である」や「ここは木である」という直接的な感覚与件をそのまま「真理」と思い込むが、それを語る者が置かれた時間や位置が変化することで、当の意識は「誤り」を経験する。しかし意識はこの個別的に把握された真理の「誤り」を介して、逆に反復可能性がある経験内容に、「普遍性」をもった真理を認めていく。こうして例えば意識は「知覚」において、「塩」という物について「それは白く、辛くもあり、結晶体でもあり、一定の重さもある等々」という「肯定的普遍性」(GW9, 72f.)を認める。しかし、そうした類いの両立可能な諸性質に対して、「知覚」は例えば「白は黒との対立においてのみある」(GW9, 76)といった、普遍的な性質の間の排斥的關係が存在することを、同時に認めていく。意識はこの「知覚」に即した一連の経験の中で、まさに「物の本質」を構成する「規定性」(GW9, 78)を見出すことが初めて可能になるのである(cf. ST, 136-9)。

3.3 「客観的観念論」という前提

以上のように、知覚された性質の両立不可能性を介して、様相を含意する普遍的概念が示されることは、さしあたり物の実質に関する本質主義を前提としている。それゆえこの意味での「概念」の実在性は、「一つの内容が主観と客観という二つの形式を持って現れる」という、「質料形相論」(ST, 205)に基づく形而上学的含意を帯びている。したがってその限りで、ブランダムが度々強調するように、仮に概念的説明を与える主体がこの世界に存在しなくとも、世界自体が概念的に構造化されている事実

変わりはない (cf. *ST*, 54f., 364f.)。しかしブランダムはさらに、この概念实在論を成立させるための前提条件を、主観の側の「全体論的な観念論」として具体化している。

すなわち、上述のように意識が個別的な「誤り」の経験を通じて普遍的な諸性質を見出す時、そこではそもそも、両立不可能な経験内容の一方の「誤り」が主観によって認められ、それが修正されることが前提されている。例えば、池に半分浸かった木の棒を素朴に観察する人が、初めは棒が曲がっていると確信し、水から引き上げられた棒が実はまっすぐだと確信した場合、その一連の過程で「棒が剛体である」と信じ続けることは矛盾する。したがって、ここで物体に「剛体である」という普遍的性質を帰属させることは、先行する確信の誤りを認め、それにより「当人のコミットメントの斉合性を回復する実践的責任」(*ST*, 76)を果たすことに等しい。それゆえ端的に言えば、ここで客観の本質をなす普遍的性質は、主観に与えられた表象間の斉合性が維持されている限りでのみ成立すると見なされる。例えば、単に水中や空気中の個別の物の見え方（表象）から棒の形状を知ろうとする試みは、その論拠に再び意識の特定の個別的な表象を持ち出す以外にないという、「悪循環的な無限後退」(*ST*, 40)に陥る。それに対し、上記のように「棒そのものは剛体である」という物自体の真理と「水中の物体が屈折している」という多様でありえる現象の区別を明示的に自覚することで、従前の「誤り」を認めて修正する意識は、有限な表象を論拠とする説明の無限後退を回避しうる (cf. *ST*, 79f.)。そこには表象と表象された物との違いが存在するものの、あくまで物の本質の説明可能性の枠内で表象間の斉合性が追求される限りでは、「表象と現実（心と世界）の間に原理的な理解可能性の隔たりは存在しない」(*ST*, 51)。

ブランダムはこの結論が、〈概念的なものは外側の境界をもたない〉というマクダウエル¹⁶のテーゼに接近していることを認めつつも、さしあたり『現象学』におけるその発想が、上述の概念实在論に欠ける前提を補うものであると位置づけている¹⁶。すなわち上述のように、客観が伴う真理様相論的構造と、主観が誤謬を訂正する実践的義務との間に相互依存関係が存在する時、この相互依存性はもっぱら観念論の枠内でのみ認められる。この関係はまず、『現象学』の「力と悟性」で主題とされる「法則」の内で見れる。例えば落下法則は、多様な物体の落下現象に「説明」を与えることで、（時間 t で距離 d を落下するという）自然現象の必然的な関係を規定する。確かに一方で、その法則は「落下」という現象によって意味が与えられる。しかし他方で落下の法則がこの世界に存在することは、現象の説明主体が世界に存在することには依存しない。この結果、概念实在論のもとで表象と現実の間に想定されていた形相的な同

¹⁶ 後述のように、このブランダムの見方では、様相的カテゴリーは世界の内に内在するものとして前提された概念的構造を改めて明示化する、メタ的な語彙として位置づけられる。それに対し、次節で扱うマクダウエルの解釈方針では、概念の客観的妥当性が、あくまで概念とは異種的な感性によって与えられるというカント的な経験の文脈を重視する観点から、ブランダムの意味論的な『現象学』解釈の枠組みに対して批判が向けられている (cf. McDowell 2020, 44)。

一性は、実在的对象自身には関与しない、「意味の依存性」(ST, 214)として読み替えられる。それを『現象学』の言葉で言い換えれば、「法則」は実在的な現象の「諸契機」を横断しつつ自己同一性を保つものとして、内容それ自体には関与しない「形式」(GW9, 93)であり、また「無限性」(GW9, 100)を伴う。しかし、このようにして「諸契機」間の必然的關係から成る「全体論的同一性」(ST, 218)を意味する「無限性」が、最終的に意識に依存していることが意識自身によって自覚される時、そこに成立するのが「自己意識」であると、ブランダムは結論づける。つまり『現象学』によれば、

「…」ある他者、つまりある対象の意識は、それ自身当然自己意識であり、自己に帰った存在であり、自らの他在における自己自身の意識である。意識のこれまでの諸々の形態にとっては、その真理は物であり、それらの形態とは別のものではあった。だが、その形態からの必然的な進行が言い表すのは、物についての意識がただ自己意識にとってだけ可能であるだけではなく、自己意識だけがそれらの形態の真理であるという、まさにこのことである。(GW9, 100)

最終的にブランダムはこの一節において、ここまで『現象学』が導いてきた議論の推移が要約されているものと整理する (cf. ST, 220f.)。すなわちまず「概念实在論」に従えば、物それ自体が常に既に様相論的な「概念的形態」を伴っている。しかし意識は、この客観と主観に共通する「概念的形態」が、実在に関与しない意味依存的なものであることを明らかにする。そこから、以前に物の真理として考えられた概念的構造が、意識が物をどう理解するかという問題から切り離しえないという「客観的観念論」が導かれる。こうして自己を意識した「自我 Ich」は、それ自身が説明の斉合性を維持する中で、「諸契機」を横断する同一性でもあるという「無限性」(GW9, 109)を実現する。だがその無限性はあくまで、有限な実在の説明可能性を超越する外側を認めずに諸々の可能性を横断するという、「全体論」的なものとして実現されうるのである。

4. 「实在論」を前提とする「概念实在論」の弁護方針

4.1 マクダウエルの概念主義

前節で見た、ブランダムが擁護する「概念实在論」は、〈概念的なものは外側の境界をもたない〉というテーゼを「観念論」を前提としながら論証するものと言える¹⁷。だがこのテーゼが由来する当のマクダウエルに見られる「概念实在論」の内には、ブランダムとは全く異なる、「概念主義」という観点からこのテーゼを擁護する試みが見出

¹⁷ ブランダムは、このテーゼを提示したマクダウエルが、自分自身と同じ「概念实在論」の立場に立つものと評価している (cf. ST, 214)。また以下のように、マクダウエルが斉合主義と所与の神話の間の第三の道を模索する点で、スターンもそこで「概念实在論」の立場が共有されていると評価している (cf. Stern 1999, 254)。

される¹⁸。さしあたりその方針は、スターンに対比されるピピンのポスト・カント主義的解釈を起点とする点において、ブランダムの斉合主義的な「観念論」よりも穏健な「観念論」を志向するものとして特徴づけられる。当のピピン自身はスターンの概念実在論との相違を強調していないものの、少なくともヘーゲルの「新たな形而上学」が「世界」等の形而上学的対象の実在性に関与するものではなく、行為者の身体的運動の因果的説明を可能にするだけであると考え、スターンとは異なる方針を示唆している¹⁹。本節では、ピピンの方針に立ちつつ、より実質的にヘーゲルの「概念」の「実在性」を導くものとして、このマクダウェルの論証の内実を明らかにする。

まず一方で、ヘーゲルの「概念」に関するマクダウェルの見解が最も明確に提示されているのは、『世界を視野に入れる *Having the World in View*』の内であると言える。ここでの考察の出発点は、ピピンがヘーゲルへの影響を指摘する、カントの「統覚」論にある。ピピンがとりわけこの文脈で強調しているのが、所謂「カテゴリーの超越論的演繹」において純粹悟性概念の客観的妥当性を導く上で、「統覚」に与えられた役割である。つまり、我々が純粹概念を用いて判断をなす限り、そこには思考を働かせる（デカルト的な）自我の実在性が常に随伴しうる。さしあたりマクダウェルはピピンと同様に、こうして「統覚」が「概念」の客観的妥当性を保証するというカントの発想が、ヘーゲルが『論理学』の内では提示する「概念」の基礎をなしていると解釈する点で、両者は同じ前提から出発する。だが、マクダウェルは同時にそこから、ピピンとは異なる、より踏み込んだ帰結を引き出している。つまり、この「統覚の統一に訴えることで我々自身に理解可能になるのは、直観の客観的な意図と判断の客観的な意図の双方である」(*HWV*, 71)、という主張がそれである。ヘーゲルの観念論がカントを「先鋭化」しているとマクダウェルが述べる時、その「先鋭化」の基準は、こうして直観と思考、ないし客観と主観の間の「均衡 *equipoise*」を徹底しているか否かに求められる²⁰。つまり、上記のようにカントは「演繹」論によって時間・空間的な感性の領域へと思考の妥当範囲を広げることを試みる一方で、同時にそこで「物自体」という非時間的・非空間的な「生の事実 *brute-fact*」を残さざるをえなかった (cf. *HWV*, 84f.)。ヘーゲルの観念論とは、そのような主観的制約を度外視した客観（世界）を許

¹⁸ とりわけ「所与の神話」に対する両者のスタンスの違いを強調する見方として、レディングは、ブラダナムの推論主義的な観念論がカント的な「可能性主義」に止まるという問題を指摘した上で、むしろマクダウェルの「知覚経験」に基づく実在論的側面を維持する「観念論」を志向するとともに、そこにアリストテレス的な「現実性主義」の含意を読み込んでいる (cf. Redding 2019, 379-88)。

¹⁹ Cf. Pippin 2018, 97, n. 125, 136f.; Dunphy 2024, 7.

²⁰ ただし、「統覚」のもとで直観と悟性が統合的に浸透すると見るこのマクダウェルのカント解釈には、直観形式とカテゴリーの相違が一様化されるという問題が指摘される (cf. Rödl 2008, 182)。松岡もまた、「均衡」という基準からカント的観念論との連続性を強調する点において、既にマクダウェルの異端的なヘーゲル「解釈」が現れていると評価する (cf. 松岡 2015, 43)。

容しないものとして、「知的自由の範囲を拡張すること」を目的とし、またその結果、「主観と客観の真の均衡を達成する」(*HVV*, 152)のものであると位置づけられている。

しかし他方で、マクダウェルはこの客観と主観の「均衡」という方針が、純然たる観念論に帰着するものではないという点に繰り返し注意を向ける。その発想は、元々はこれに先立つ『心と世界 *Mind and World*』の内で表明された、主観と客観の関係をめぐる「不安」(*MW*, xi)に淵源を持つが、その「不安」の内実は、まさに実在論と観念論のいずれにも帰着しえない視点の動揺として描き出されている。すなわち、我々の心が世界に対して持つ関係を理解するに際して、一方では世界という「客観性」に優位を認める方針が第一にありえる。それはつまり、我々の信念を正当化する「法廷」を感覚的な「所与」の内に求める、経験論の方針に当たる。しかしこの方針は、セラーズの「所与の神話」批判によって、アポリアに巻き込まれざるをえない。というのも、我々の信念の合理的な根拠を担いうるものは、本来は「概念の空間」内に位置づけられた内容以外にはないからである²¹。他方ではそれとは逆に、心という「主観性」に優位を認める第二の方針がありえる。これは信念を正当化できるものが結局は信念だけだとする、デイヴィドソンの斉合主義の方針に当たる。しかしこの方針も、やはりアポリアを免れない。というのも、上記の「理由の空間」がそのまま「概念の空間」に重なるとすれば、思考を担う自発性の働きは、外界の制約を受けない「摩擦なき空転」(*MW*, 11)以外ではなくなるからである。デイヴィドソン自身は「観念論」(*MW*, 26)の立場こそ標榜しないものの、しかし、斉合主義は上記の自発性の働きが「空転」に終わるという「不安」を払拭しきれないために、「演繹」論の結果「物自体」という所与を招き入れたカントと同様に、「所与」に依存する「神話」を再び招きかねない²²。

その帰結として、マクダウェルはこの動揺から脱する第三の道を提示する。それがすなわち、経験された知覚内容は、それが受容された時点で概念能力によって浸透されているという、直接的な経験の理解である。例えば「このポストは赤い」という知覚が得られた時点で、我々は既に「赤」という概念をその他の色彩から区別可能な形で使用していると言える。こうして知覚内容に対する感受性に、概念能力の自発性が不可分に浸透するという両立論的な経験の理解のもとでは、カントのように概念能力の境界の外に未回収の実在を「生の事実」として想定する必要はなくなるのである²³。

²¹ 例えば、木々が風に揺れる情景を目にしたとしても、そこで同時に一枚一枚の木の葉の形状が概念的に把握されているわけではない。こうして、単に雑多なものとして経験される知覚内容は、本来は概念領域の外に置かれている (cf. *MV*, 7; Bordignon 2018, 159f.)。

²² Cf. Bordignon 2018, 165f.

²³ ただし、マクダウェルはその後、知覚の「内容」そのものが概念的に分節化可能なものとして与えられているという、『心と世界』で唱えられていた強い意味での、あるいは形而上学的含意を伴う概念主義に修正を加えている (cf. Sanguinetti 2018, 143f.; 岡部 2025, 56-9)。

4.2 ヤコービの「實在論」との並行関係

マクダウェルがヘーゲルの観念論に見出す「境界なき概念能力」という枠組みは、まずは以上の主観と客観の「均衡」の観点を介してカント的観念論を先鋭化するという、理論的問題関心から要請されている。確かにマクダウェルは、こうして「思考」と「世界」の間にいかなる「存在論的ギャップ」(*MW*, 27) もないと主張する点で、ヘーゲルの概念實在論を受け入れていると言える²⁴。だがその概念實在論の論拠は、スターンが想定したスピノザ的原理に基づく「全体論的観念論」とは全く異なっている。以下では、経験に直接的に浸透する概念能力を主張する点でマクダウェルが実質的に接近しているものが、むしろ『予備概念』でスピノザ主義に対峙させられた立場に、すなわち、ヤコービの〈第三の思想の態度〉に接近しているという見方を提示したい。

まず両者の最も明確な並行関係は、「物自体」をめぐる批判哲学のアポリアからの脱却を目指す方向性に現れている。周知のように、ヤコービは所謂『デヴィッド・ヒューム』の付論において、現象だけに関わる「超越論的観念論」を標榜しながらも「物自体」が感受されると主張する、カント哲学の不条理を指摘する²⁵。というのも、仮に「物自体」が因果性等の概念の適用外に残される場合、能動・受動等々の概念が「實在的で客観的な規定」(*JWA* 2, 1, 109) として妥当することはなく、むしろ概念は一切の意義を欠くからである。ヤコービはマクダウェルと同様に、このように概念の連関が摩擦なき空転に終わる「不安」を、カント的な観念論自体に差し向ける。すなわちその両者にとってカント哲学が取りえる道は、「物自体」という想定を捨て去って、「整合的な観念論」(*MW*, 44)、ないし「最も強烈な観念論」としての「思弁のエゴイズム」

(*JWA* 2, 1, 112) という立場を受け入れる以外にはない。最終的に「信念」として表明されるヤコービ自身の直接知は、この「観念論」の枠組み全体へと押し広げられた「不安」を払拭する道の上で、初めて提示されうるものと言える。すなわち、所謂『スピノザ書簡』のやはりよく知られた一節が語るように、我々が「直接的な確実性 *Gewißheit*」をもちえるとすれば、それは「私たちが身体をもつこと、また私たちの外部に他の物体や他の思考するものが存在すること」を内容とする、「信念」(*JWA* 1, 1, 115f.) による以外にない。こうして「あらゆる証明を絶対的に排除する」ことで、〈外

²⁴ この観点から見れば、経験論的な「所与」とカント的な「斉合主義」の双方に向けられたマクダウェルの批判は、前述の「予備概念」で〈第二の思想の態度〉として挙げられる「経験論」と「批判哲学」に向けられたヘーゲルの非難とも軌を一にしている (cf. Bordignon 2018, 159f.)。つまりヘーゲルによれば、一方の「経験論」では「全てを証明できる」(*GW* 20, §37) 確固たる支えが客観に求められながらも、実際には経験の「無限に多様な素材」が、証明の基礎にある概念の「必然性」(*GW* 20, §39) を与えることはない。また他方の批判哲学では、主観の「思考規定」が「感性的な素材のもつ普遍的な関係」(*GW* 20, §40) を規定するとされるものの、その「カテゴリーによる認識は、実際には客観的なものを何も含んではいない」(*GW* 20, §46)。

²⁵ つまり、「我々の感官に印象を与える […] 様々な対象を前提することと、この前提を支える一切の根拠を水泡に帰す学説とを一緒にすることが、どうしてできるのか」(*JWA* 2, 1, 111)。

側の境界を持たない〉ものとして成立する身体的な知覚のもとでは、カント的観念論が本来実現すべきものとしてマクダウェルが主張する〈主観と客観の均衡〉と同様に、「表象されたものと一致する表象そのもの」(ibid.)が直接的に知られうるのである²⁶。

4.3 〈自己 Selbst〉に基づく実在論

以上のように、ヤコービの実在論に対する概念主義の並行関係に鑑みると、マクダウェルによって『現象学』の「自己意識」に対して示された「異端的」解釈が、従来ヘーゲル自身の立場から逸脱したものと思われてきたことは、ある面で正当だと言える²⁷。だがここで、その解釈の中で強調された〈自己 Selbst〉に基づく実在論の意義が、『予備概念』の〈第三の態度〉としての直接知と共鳴しているという上記の哲学史的側面を補完する時、そこで〈自我 Ich〉に基づく観念論に対抗するものとして提示された方向性の内には、ヤコービとのもう一つの並行関係を指摘することができる。

すなわち、一方の哲学的文脈に焦点を当てると、まずこの〈自己 Selbst〉と〈自我 Ich〉という主体性の対照的關係は、カント的観念論を標榜するフィヒテに改めて非難を差し向ける、ヤコービの論難の内に既に姿を現している。つまり上記のように、仮にカント的観念論のもとで物の本質が自我によってのみ把握されうるとすれば、その客観的観念論には思弁的なニヒリズムに陥りうる危険が常に付きまとう。それゆえヤコービの強調点に従えば、「自我性」に基づく観念論において、「ある本質が我々によって完全に把握された対象となったとされる場合、我々はそれを客観的に——自分に対して für sich 存立するものとして——思想のうちで廃棄 aufheben し、無化 vernichten してこそ初めて、それを徹底的に主観的なものに […] できるに違いない」(JWA 2, 1, 201f.)。そして、この評価の前提には、「通常の感性的な悟性における〈自己 Selbst〉」(JWA 2, 1, 210f.)の内に最も確実な主観と客観の均衡が認められるとする、直接知に基づく実在論が存在している。つまり逆に言えばその非難は、フィヒテがむしろ「かの〈自己 Selbst〉を欠いた自我の単なる自我性」を上位に置くことで、「良心 Gewißen (つまりより確実な精神 den gewißeren Geist) を、他でもなく理性性という生きながらに死んだものに委ねている」(ibid.) 点にこそ、向けられているのである²⁸。

²⁶ ブルーノは、マクダウェルの実在論が、ヤコービによって超越論的観念論に向けられた挑発に対する、一つの応答として見なしうるという解釈を与えている (cf. Bruno 2020, 35f.)。

²⁷ Cf. Gabriel 2017, 96. また小原が要約するように、「主人と奴隷」の弁証法に至る過程までも、一つの自己意識が他なるものを克服していく過程にとっての寓意的な意味を持つとするマクダウェルの「自己意識」章の解釈は、概ね否定的に評価されている (cf. 小原 2025, 89)。

²⁸ ヤコービによってフィヒテの「自我」に欠けるものとして指摘されているのは、まさに「人格的な実存という還元不可能な個性とアイデンティティ、一言で言えば精神」としての「自己」であるとザントカウレンは特徴づける (cf. Sandkaulen 2019, 71)。この人格の実存を根拠に持つヤコービの立場は、認識論的には「直接の実在論」とも呼びうる (cf. Acerbi 2023, 91f.)。

他方で、このように生を内在させる感性と不可分な〈自己〉の側面を、『現象学』そのものの内において強調するマクダウェルの「異端的」な解釈は、実質的にヘーゲルが「自己意識」論に即して主題化するこの〈第三の態度〉を、理論的観点から再構成したものとして評価できる。すなわち前節で見たように、まず「自己意識」は、感覚と知覚を自身の内にあるものとして意識することで、「自己意識のそれ自身との統一」のみを「真理 Wahrheit」(GW9, 104)と認めることから出発する。意識はその限りで第一に、「純粋な自我 Ich を対象とする」(HWF, 160, n. 23; GW9, 107)。だがマクダウェルの解釈に最も特徴的なのは、この〈自我〉には依然として「感覚的世界の広がり全体」(GW9, 104)が保たれており、したがってまた、「生きる場としての「感覚的世界の広がり全体」に縛られた生をおくる主体」である、「経験的主体としての自己自身」(HWF, 163)という側面が併存していることを強調する点にある。すなわち、第一の統覚的自我は、他者をもっぱら「欲求」の対象と見なし、この「自分に対して自立した生命として現れる他者」を「廃棄する aufheben」あるいは「無化する vernichten」ことによってのみ、「自分自身を確信する」(GW9, 107)にすぎない²⁹。そのためこの思弁的なニヒリズムと紙一重の確信は、他者と同じ当の生命を自らの存在の内に認めるという、第二の「自己の意識 Selbstbewußtseyn」(GW9, 111)には依然として到達していない。むしろこの意味での自己意識は、「生命」を賭した闘争の果てに他者を承認し、これによって「自己意識にとって、純粋な自己意識と同様に生命も本質的なのだということがこの自己意識に明らかになる」(GW9, 112)ことを通じて初めて、「真理となった確信〔確実性 Gewißheit〕」(GW9, 108)でありえるのである。こうしてマクダウェルの解釈は、「自己」の自覚を欠いた統覚的「自我」が、当初は自身との同一視をもっぱら拒否するに過ぎなかった他者の内に自らの本質を見出すという二重の反省を行い、その結果、「生を生きる個体」(HWF, 160)の意識の中で「単一の個人の意識がもつ二つのアスペクト」(HWF, 164)が生じてくるものと、一貫して見なしている。総じてその解釈の意義は、「自我」に基づく観念論が本来実現すべき〈主観と客観の均衡〉を、むしろ日常的経験に基づく實在論によって代替的に実現するという、意識の〈自己〉が内在させる〈第三の思想の態度〉の内実を明らかにしている点にあると言えよう³⁰。

²⁹ 前節末尾で言及した、カント的観念論とヤコービの實在論との対立について、ヘーゲルは既に所謂『信仰と知』の中で整理を与えている。すなわち、「[フィヒテの]体系は、絶対者の否定的側面に、無限性に、すなわち絶対的思考としての自我 Ich にまで高揚する。その限りでは、この体系は純粋な観念論である。しかしその否定的側面そのものが絶対的に肯定的なものとして措定されるがゆえに、純粋な観念論は形式的になり、實在論と対立してしまっている。純粋な観念論は、諸々の対立物をただ無限者のうちで同一化することしかできず、抽象する思考を、すなわち純粋な活動を存在に對立させて絶対的なものにする。そのためにその観念論が、諸々の対立を真に無化する vernichten ことはないのである」(GW4, 388)。

³⁰ 従来ヤコービの直接知は、マクダウェルが非難する「所与」を認める立場として位置づけられてきた。だが、「所与」が概念能力の外側から経験的に与えられるのに対し、直接知はむしろ概念的な「知」と知の対象の非同一性を伴うものではない。この点で直接知はむ

5. L-M テーゼの再検証

5.1 概念の「形式」と「内容」の対立

第3、4節で明らかにした「概念実在論」に対する二つの論拠は、『現象学』の「自己意識」の二つの位相に即して具体化されている。だがそこで論証された「概念実在論」は、『論理学』が提示しようとする「概念」観のもとで、果たして両立可能であるのか。あるいはそれ以前に『現象学』の中でも既に、マクダウェルが指摘した「自己」の意識は、その後の「精神」章に至る記述の中で、より一層「自我」と対立する意義を担わせられているという問題が伴われている。つまり「自己意識」の後、理性として「自己疎外」された「精神」が最終的に「良心」のもとで自己を回復するというその過程は、それ自体が三つの「自己 Selbst」の形態を通過するものとして描き出される。とりわけその終着点で「良心」を自覚する「道徳的自己意識」は、自身の個別的行为が普遍的な道徳的義務に当てはまるケース、すなわちその「場合」を、直接的で具体的な形で知る」ことにより、「自体と自己との分離を廃棄する」(GW9, 342)。この結果、「普遍的な自体としての義務に、良心が自らの自然的な個性からとり出した内容を置き入れる」(GW9, 350)という局面に至って今一度姿を現しているものこそ、ヤコービが直接的確実性を認めた、「知の感覚的確信」(GW9, 342)に他ならない。それはつまり、「精神」章に至る『現象学』の記述全体の内でも既に、「感覚的確信」の真理を「形式」に基づいて明らかにしてきた「自我」の観念論に対し、形式に欠ける「内容」を主張する「自己」の直接知の視点が、対立し続けていることを意味している³¹。

ここまで概観してきた「概念実在論」の観点から、第2節で予め導入した L-M テーゼに対する整合的な解釈を改めて試みるに際して、ひとまず形而上学に対するヘーゲル論理学の位置づけに関する直近の諸解釈の方針を見ると、それらは主にここで問われている、概念の「形式」と「内容」の間の対立軸をめぐる展開されているものとして整理できる。すなわち一方では、ブランダム解釈と同様に、「論理学」が主題的に問うものを概念の論理形式として前提する立場からすれば、存在や世界が伴う「形而上学」的な構造は、この「形式」によって余す所なく置き換えられうると考えられる³²。この観点からすれば、「論理学」の中で「形而上学」的な内容が語られるにせよ、

しろ、マクダウェルの言う「境界なき概念能力」と共通する含意をもつものとして位置づけられる (cf. Bordignon 2018, 157; Bruno 2020, 43)。

³¹ 特に「絶対者」の「自己知」の観点に着目しつつ、以下で取り上げる「形式」と「内容」の統合に即して『現象学』全体の構造を再解釈する直近の試みとして、以下を参照 (cf. 田端 2024, 185-221)。

³² この見方に基づくと、『論理学』の構成は〈客観的論理学〉に見られる形而上学的内容に対し、むしろ〈主観的論理学〉に見られる論理形式や叙述方法が、より根本的な主題をなすと解釈される (cf. Nuzzo 2020, 151)。

当の内容は論理形式に「付随する」形で、派生的に現れてくるものにすぎない³³。それに対して他方で、統覚に担われる「純粋思想」の「学」(GW21, 33)という側面を強調するピピンに代表される解釈では、『論理学』では思考自体がそれに固有の内容を提供ないし産出する」(Pippin 2019, 351)という方向性が強調される。この観点から見れば、むしろ「内在的規定における思考と事物の真の本性が、同じ内容である」(GW21, 29)ことを主張する、形而上学が伴う内容が「論理学」の前提をなすと考えられる³⁴。その結果、「論理学」が扱う概念的な「形式」に関しては、それがあくまで先行する思考の「内容」を反映する形で「導かれている」かどうか問われうるにすぎない³⁵。

こうして L-M テーゼの内実について「形式」と「内容」のいずれを基準に解釈すべきか、という論点は、さしあたり互いに相容れない主張の対立を伴っていると言える。

5.2 思弁的命題における概念の「自己運動」

だがこの文脈において、『論理学』へと接続する枠組みが示されていく、『現象学』「序文」の所謂「思弁的命題」の説明に立ち戻ると、そこにはここまで「概念實在論」に即して析出されてきた〈自我 Ich〉から〈自己 Selbst〉への意識の転回に即して、概念の「形式」と「内容」をむしろ判断の不可分な両側面として提示しようとする、ヘーゲルの根本的な着想を見出すことができる。より具体的に言えば、ここでの議論の主眼は、上記の「形式的思考」が伴う「理屈を捏ねる態度」の内に、「概念把握する思考」(GW9, 41f.)からの隔たりを示す、二つの側面の存在を指摘することにある。すなわち第一に、この「形式的思考」は、「把握された内容に否定的な態度をとり、それを反駁し、無に帰すことを心得る」ものとして、「空虚な自我 Ich への反省」(GW9, 42)という側面を伴っている。ここに要約されているのは、物に関する知覚内容を、排斥的な概念形式の内では把握しようとする、観念論的な〈自我〉の否定的側面であると言える。しかし第二に、この「理屈を捏ねる思考」には、それ自身が「内容の帰りに行く自己 Selbst」として捉え返されるという、「思考的な把握である運動」(ibid.)として

³³ ヴォルフは、こうして〈形而上学は論理形式に付随する〉という主張を、「付随性テーゼ supervenience thesis」として定式化した上で、それがブランダムの『現象学』解釈にも共有されているものとして評価している (cf. Wolf 2021, 274)。

³⁴ この見方が、『論理学』の掲げる「無前提性」の要求に反するという懸念については、リトルがピピンのカント主義的解釈を延長する形で反論を行っている (cf. Little 2024, 667-74)。

³⁵ ピピンはこの種の問題が、カントの「触発」論に由来すると考えている。例えば、隣り合う正方形の図形が異なる「色」を持つという概念的な理解は、それらの正方形が別々の色を持ちつつ隣り合う関係にあることに相当する感覚印象によって「導かれている」。オザが「ガイダンス問題」(cf. Oza 2022, 4)とも定義するこの論点に基づくと、『論理学』の構成はヴォルフとは対照的に、形而上学的な「存在 Ens」の内容を提示する〈客観的論理学〉が〈主観的論理学〉の前提にあると解釈される。同様にレディングは〈客観的論理学〉の「内容」から独立した〈主観的論理学〉の形式を認めないという点に『論理学』固有の方針を見することで、ブランダムの可能性主義とは異なる視点から「概念實在論」を擁護している (cf. Redding 2021, 21-8)。

の側面が同時に存在しているとヘーゲルは主張する。そしてさらにここでこの「運動」の側面は次のように、まさしく判断の枠組みに即してより詳細に描き出されている。

通常の場合、主語は対象的に固定された〈自己〉として根底に置かれ、そこから多様な諸規定や諸述語へと必然的な運動が進んでいく。だがここで前述の主語に取って代わって、〈知る自我〉そのものが入り込むのであって、この自我が諸述語を結びつけて、それらを保持する主語となる。しかし、前述の第一の主語は諸々の規定へと入り込み、それらの魂となる。それゆえ第二の主語、すなわち知る主観は、主観がそれを用済みのものとし、さらにそれを越えて主観がそれへと帰ろうとしている第一の主語が、まだ述語のなかにいることを見出す。そうして主観は述語の運動の中で、あれこれの述語を第一の主語に添えて多弁を弄することをなしうるはずが、その代わりに内容的な〈自己〉を問題にせねばならず、それ単独ではなく、この〈自己〉とともにいなければならないのである。(GW9, 42f.)

この一節には、ここまで示されてきた、観念論的な〈自我〉を軸に一巡する意識経験の過程が、圧縮された形で再現されていると言えよう。つまり、意識の出発点は「今」や「ここ」として固定化された、〈自己〉の「直接知」(GW9, 63)に置かれていた。だが次第に意識が「誤り」を経験する中で、直接知られた物が「何であるか」を語る述語は、否定的な規定として現れる。こうして意識が「知覚」から「自己意識」に進むにつれ、物を述語づける普遍的な諸規定は、それらの斉合的關係を維持する〈自我〉にとってのみ可能であることが明らかにされる。だが実際には、こうして導かれた諸規定は、意識が〈自己〉のもとで見出した内容を「用済み」とし、無に帰すことによって初めて〈自我〉に還元されうるにすぎない。そのため〈自我〉が自らの諸規定を越えて、知と対象とに分離されていない判断の内容を再び見出そうとすると、「述語」ではなく〈自己〉が伴う本来の「主語」に立ち返ることを余儀なくされるのである。

この結果、意識が主観・客観の区別を解消する〈自己〉の「内容」に立ち返ることで、判断のもつ「命題一般の形式」は「破壊される」(GW9, 43)³⁶。しかしこの〈自己〉から〈自我〉、そして再び〈自己〉へと回帰する意識の転回こそが、むしろ観念論の眼からこぼれ落ちる、「概念の内在的なリズム」(GW9, 42)をなすと、ヘーゲルは結論づけている。最終的にこの観点から、第3節で言及された『論理学』の「本質主義」へと改めて眼を向ければ、そこで「概念実在論」の前提を担う「本質」の内実として確認されているものは、概念の「形式」と不可分でありながら命題形式を破壊するという、『現象学』から引き受けられた概念的「内容」のもつ運動であることが示される。つまり前述のように、個々の動物も持ちえる「固有の本質」は、「それが他の極めて多

³⁶ 思弁の命題論が有する命題形式への批判的意義については、以下を参照 (cf. Lau 2006, 60f.)。

様な述語を備えたものから取り除かれるとすれば、そうした個体がなお何であるかは語りえなくなる」(GW21, 15)。しかしそれは、当の本質が何らかの述語として語られるからではない。むしろそれは、本質が判断の主語として、「諸対象についての主観的思考の脈動」を担い、また「内容に付属する単なる無関係な形式と見なされることはできない」(ibid.) からに他ならない。言い換えれば、この一つの到達点から『論理学』「序文」が振り返るように、一方では『現象学』が感覺的確信から自我の知として展開してきたものは、「具体的かつ外面性に囚われた知 Wissen としての精神」(GW21, 8) であるに過ぎない。だが他方でそこで受け継がれた知の「本質」は、知の形式的側面によっては汲み尽くされえない、概念の「内容」を含意している。つまり、実際には「この対象の進行は、あらゆる自然的かつ精神的な生の発展と同様に純粋な本質性の本性にのみ基づき、その本質性が、論理学の内容 Inhalt を形作るのである」(ibid.)。

この対象の進行を駆動し、概念的思考にリズムを与えるもの、つまり本質に「精神的な生」を与えるものを、ヘーゲルは「本質性の自己運動 Selbstbewegung」(GW21, 8) とも呼ぶ。それはつまり、ここで「論理学」が引き受けようとしている課題が、『現象学』の〈自己〉が「真理」を「確信」する一連の過程を抜きには語りえないこと、したがってまた、ここでもなお「学としての真理が、純粋な自己発展的な自己意識であり、自己 Selbst という形態を持っている」(GW21, 33) ことを意味しているのである。

6. 結論

本稿は以上により、ヘーゲルの「論理学」が「形而上学」を置き換えうる可能性を、「概念實在論」の観点から明らかにしてきた。その道筋を振り返れば、まず第2節では、スターンに由来する「概念實在論」には、ヘーゲル哲学を「形而上学」と見るか否かという争点を越える高次の観点から、「實在論」と両立可能な「観念論」の枠組みを示す意義があることを確認した。その上で続く第3節では、スターンの方針の延長線上において、本質主義的解釈に基づきつつ様相の枠組みによって概念實在論を具体化する、ブランダムの方針を再構成した。特にその方針では、様相を伴うスピノザ主義的な規定性の理解を可能にするものとして、規定性の否定から導かれる「全体論的」な観念論が要請されるという前提が析出された。それに対し第4節では、むしろ全体論的な「世界」の存在を前提することなく、主観と客観の「均衡」を先鋭化することで概念の實在性を導く、マクダウェルの方針を再構成した。特に観念論に潜在的に含まれる「世界」との摩擦を失う「不安」が、カント主義に向けられたニヒリズムをめぐるヤコービの批判と共鳴しながら、身体的知覚の内に浸透した概念内容を認めるといふ、能動と受動が不可分な「直接知」と共通の實在論を導いている事情が示された。

まずもって「予備概念」の〈思想の第三の態度〉に挙げられたヤコービの「實在論」に対比されるものという、スターンが強調したヘーゲルの「観念論」の位置づけは、

以上の「概念実在論」をめぐる対比的な二つの立場に即して実質的に理解されうる。すなわち、ブランダムとマクダウェルの「概念実在論」は、共に〈概念的なものが外側の境界を持たない〉ことを主張しながらも、前者が世界を充たすように拡張する全体論的「観念論」を志向するのに対し、後者は有限な統覚の一点に収斂する「実在論」を志向する点で、概念的なものの領域に関しては全く相反する両極端な方針を指し示している。この時、両者の立場に決定的な分岐をもたらしているのは、マクダウェルが根本的に「観念論」に投げかける、ニヒリズムへの「不安」であると言える。つまり、ヤコービがフィヒテに非難を向けたように、スピノザ主義に基づいてあらゆる有限な規定が否定性を逃れえないとすれば、斉合的な「観念論」は確実な実在性を一切もたない「最も強烈な観念論」に帰着する以外にはない。この時その陥穽から逃れる唯一の道は、規定の間の一切の「媒介」を排除した、直接知の一点に収斂する「実在論」だけである。「予備概念」の内の観念論と直接知の対比は、こうして媒介知と直接知によって構成されうる中間的な立場の一切を排除する、ヤコービの「観念論」批判の枠組みを反映することによって、初めて成立することができたものだと言えよう³⁷。

しかしその一方で本稿は、ヘーゲルが「概念実在論」に即して示そうとする、「形而上学」と合致する「論理学」の内実が、単にヤコービの直接知と同じ地点に帰着するものではないことを同時に論証してきた。すなわち第5節では、上記の『現象学』『自己意識』章に依拠する二つの解釈が、それぞれ概念の「形式」と「内容」の観点から異なる『論理学』解釈を導きうることを確認しつつも、同時に命題の「思弁的」な理解の枠組みの中では、この形式と内容がむしろ、命題の不可分な両側面へと反映されうるという事情が示されている。すなわち、「観念論」を基礎づける知る〈自我〉が、命題の述語を「形式」的側面から斉合的に集約するとすれば、「直接知」に収斂する〈自己〉は、命題の主語を「内容」的側面から充実させる。確かに一方では、〈自我〉が客観的対象の本質を汲み尽くすことで己の知の虚無性を自覚し、再び内容的な〈自己〉に還帰するという帰結には、依然としてヤコービの「観念論」批判が反響している。しかし他方でヘーゲルは、こうして形而上学的な実在性と重なり合いながら、極大と極小の概念領域の間で膨張と収縮を繰り返す脈動としての思考それ自身の一連の過程を、むしろ「概念」に内在的な自己運動として評価する。その運動の側面は、あらゆる媒介知を排除し、自己の一点に静止し続ける「直接知」とは、真逆のものである。

この帰結から、再度「予備概念」における直接知の評価に立ち戻れば、こうして有限な経験的事実の直接的な「確実性」を主張する「信念」の立場は、「すべての証明を絶対的に排除する」点で、「観念論」に対立すると同時に、むしろより端的に、「哲学すること」(GW20, §64)に反対し、「哲学と哲学学説とに最も強く反撥することを標榜

³⁷ 特にクライネスは、この中間的な立場の排除という点に、体系哲学全般に対するヤコービによる批判の意義を見ている (cf. Kreines 2018, 615)。

する屁理屈」(GW20, § 77) とも位置づけられている。それは逆から言えば、仮にそれ自体が否定性を伴い、実在性へ到達しえないとしても、概念領域を推し広げる規定性を獲得することへと歩みを進めることこそが、ヘーゲルからすれば「哲学」そのものの営みを意味するということでもある。したがってこの「直接知」と対峙する中で形作られるヘーゲル的な「概念実在論」は、「観念論」一般に向けられた高次の観点からの非難に応答すると同時に、そもそも「哲学」一般の営みが何を意味するのかを「反-哲学」的立場に向けて呈示するという意味で、文字通りそれ自体メタ哲学的な問いの中で「概念」の「実在性」を主張しているものと結論づけることができるであろう³⁸。

※本研究は JSPS 科研費 22KJ2034 の助成を受けたものである。

凡例

GW: Hegel, Georg Wilhelm Friedrich. (1968-). *Gesammelte Werke*, in Verbindung mit der Deutschen Forschungsgemeinschaft, herausgegeben von der Rheinisch-Westfälischen Akademie der Wissenschaften, Felix Meiner Verlag, Hamburg.

JWA: Jacobi, Friedrich Heinrich. (1998-). *Werke. Gesamtausgabe*, herausgegeben von Klaus Hammacher und Walter Jaeschke. Felix Meiner Verlag, Hamburg.

参考文献

- Acerbi, Ariberto. (2023). 'Jacobi's argument and dilemma: Theism and christianity', in Hampton, A. J. B. E. (ed.), *Friedrich Heinrich Jacobi and the Ends of the Enlightenment: Religion, Philosophy, and Reason at the Crux of Modernity*, Cambridge University Press, Cambridge, pp. 87–103.
- Alznauer, Mark. (2023). 'Untrue Concepts in Hegel's Logic', *Journal of the History of Philosophy* 61, pp. 103–26.
- Bordignon, Michela. (2018). 'Objectivity and Subjectivity in Hegel and McDowell', in Sanguinetti, F., A. J. Abath (eds), *McDowell and Hegel*, Springer International Publishing, Cham, pp. 155–74.
- Bowman, Brady. (2013). *Hegel and the Metaphysics of Absolute Negativity*, Cambridge University Press, New York.
- Brandom, Robert. (2019). *A Spirit of Trust: a Reading of Hegel's Phenomenology*, Belknap Press of Harvard University Press. [=ST]
- Bruno, G. Anthony. (2020). 'Jacobi's Dare: McDowell, Meillassoux, and Consistent Idealism', in Finkelde, D., P. M. Livingston (eds), *Idealism, Relativism, and Realism: New Essays on Objectivity Beyond the Analytic-Continental Divide*, De Gruyter, Berlin, Boston, pp. 35–56.
- Chambers, James. (2021). 'Hegel's Metaphilosophy of Idealism', *Metaphilosophy* 52(5), pp. 628–41.
- deVries, Willem A. (2019). 'Hegel and Sellars on the Unity of Things.', *International Journal of Philosophical Studies* 27(3), pp. 363–78.
- Dunphy, Robb. (2024). 'What Does It Mean to Say, of 'Thoughts', That They 'Used to Count as Expressing the Essentialities of Things'? Hegel and the Older Metaphysics', *International Journal of Philosophical Studies*, pp. 1–18.
- Ficara, Elena. (2020). *The Form of Truth: Hegel's Philosophical Logic*, De Gruyter, Berlin, Boston.

³⁸ 既にスターンは「予備概念」の分類に即しつつ、マクダウエルの常識的実在論が「批判哲学」からの連続性を保つというよりも、むしろ「哲学」の営みそのものから乖離していく「直接知」との親和性を伴っていることを示唆している (cf. Stern 1999, 263f.)。

- Gabriel, Markus. (2016). 'What Kind of an Idealist (If Any) Is Hegel?', *Hegel Bulletin* 37, pp. 181–208.
- . (2017). 'A Very Heterodox Reading of the Lord-Servant-Allegory in Hegel's Phenomenology of Spirit', in Gabriel, M., A. M. Rasmussen (eds), *German idealism today*, De Gruyter, Berlin, Boston, pp. 95–120.
- 碓智樹. (2024). 『ポスト形而上学的思考としてのヘーゲル哲学：ヘーゲルの形而上学批判』, 晃洋書房.
- Houlgate, Stephen. (2022). *Quality and the Birth of Quantity in Hegel's 'Science of Logic'*, Bloomsbury Academic, London.
- Knappik, Franz. (2016). 'Hegel's Essentialism. Natural Kinds and the Metaphysics of Explanation in Hegel's Theory of 'the Concept'', *European Journal of Philosophy* 24(4), pp. 760–87.
- Kreines, James. (2015). *Reason in the World: Hegel's Metaphysics and Its Philosophical Appeal*, Oxford University Press, Oxford.
- . (2018). 'Systematicity and Philosophical Interpretation: Hegel, Pippin, and Changing Debates', *Australasian Philosophical Review* 2(4), pp. 393–402.
- Lau, Chong-Fuk. (2006). 'Language and Metaphysics: The Dialectics of Hegel's Speculative Proposition', *Proceedings of the Hegel Society of America* 17, pp. 55–74.
- . (2016). 'A Deflationary Approach to Hegel's Metaphysics', in Laurentiis, A. de (ed.), *On Logic and Ontology in the System*, De Gruyter, Berlin, Boston, pp. 27–42.
- Little, Eliza Starbuck. (2024). 'Kant's Leading Thread in Hegel's Science of Logic', *International Journal of Philosophical Studies* 32(5), pp. 655–77.
- Magee, Glenn Alexander. (2016). 'Hegel as Metaphysician', in Laurentiis, A. de (ed.), *Hegel and Metaphysics*, De Gruyter, Berlin, Boston, pp. 43–58.
- 松岡健一郎. (2015). 「マクダウエルが言う「ヘーゲル」とは、どんな哲学者なのか」, 『哲学論究 = Philosophical research』29号, pp. 41–54.
- McDowell, John. (1996). *Mind and World: With a New Introduction by the Author*, Harvard University Press, Cambridge. [= MW]
- . (2009). *Having the World in View: Essays on Kant, Hegel, and Sellars*, Harvard University Press, Cambridge. [= HWV]
- . (2020). 'Brandom on the Introduction to the Phenomenology', in *Reading Brandom: on A Spirit of Trust*, Routledge, New York, pp. 41–55.
- McNulty, Jacob. (2022). *Hegel's Logic and Metaphysics*, Cambridge University Press, New York.
- Nuzzo, Angelica. (2020). 'Method in Hegel's Dialectic-Speculative Logic', in Bykova, M. F., K. R. Westphal (eds), *The Palgrave Hegel Handbook*, Springer International Publishing, Cham, pp. 151–66.
- 小原優吉. (2025). 「『精神現象学』自己意識章における理論的主題と実践的主題の連関」, 『倫理学年報』74巻, pp. 87–101.
- 岡部幹伸. (2025). 「マクダウエルにとって概念主義論争はなぜ終焉を迎えるのか」, 『科学基礎論研究』52巻(1・2号), pp. 51–65.
- Oza, Manish. (2022). 'Hegel and Formal Idealism', *Hegel Bulletin* 45(3), pp. 1–25.
- Pippin, Robert. (2018). *Hegel's Realm of Shadows: Logic as Metaphysics in "The Science of Logic"*, University of Chicago Press, Chicago
- . (2019). 'Idealism and Anti-idealism in Modern European Thought', *The Journal of Speculative Philosophy* 33(3), pp. 349–67.
- Redding, Paul. (2019). 'Rethinking Sellars' Myth of the Given: From the Epistemological to the Modal Relevance of Givenness in Kant and Hegel.', *International Journal of Philosophical Studies* 27(3), pp. 379–98.
- . (2021). 'Actualist Versus Naturalist and Conceptual Realist Interpretations of Hegel's Metaphysics', *Hegel Bulletin* 42(1), pp. 19–38.
- Rödl, Sebastian. (2008). 'Eliminating Externality', in Ameriks, K. P., J. Stolzenberg (eds), *2007: Metaphysik / Metaphysics*, Walter de Gruyter Berlin, Boston, pp. 176–88.

- Sandkaulen-Bock, Birgit. (2019). *Jacobis Philosophie: über den Widerspruch zwischen System und Freiheit*, Felix Meiner Verlag, Hamburg.
- Sanguinetti, Federico. (2018). 'Hegel and McDowell on the "Unboundedness of the Conceptual"', in Sanguinetti, F., A. J. Abath (eds), *McDowell and Hegel*, Springer International Publishing, Cham, pp. 135–53.
- Stern, Robert. (1999). 'Going Beyond the Kantian Philosophy: On McDowell's Hegelian Critique of Kant', *European Journal of Philosophy* 7(2), pp. 247–69.
- (2009). *Hegelian Metaphysics*, Oxford University Press, Oxford.
- (2016). "'Determination is negation': The Adventures of a Doctrine from Spinoza to Hegel to the British Idealists", *Hegel Bulletin* 37(1), pp. 29–52.
- (2018). 'Kreines on the Problem of Metaphysics in Kant and Hegel', *Hegel Bulletin* 39(1), pp. 106–20.
- 田端信廣. (2024). 『ヘーゲル『精神現象学』の建築術』, 萌書房.
- Taylor, Charles. (1977). *Hegel*, Cambridge University Press, Cambridge, New York.
- Webster, George. (2022). 'Rethinking Maker: Hegel's Realism Revisited', *Hegel Bulletin* 44(2), pp. 297–320.
- Wolf, W. Clark. (2018). 'Rethinking Hegel's Conceptual Realism', *Review of Metaphysics* 72(2), pp. 331–70.
- (2021). 'Metaphysics Supervenes on Logic: The Role of the Logical Forms in Hegel's 'Replacement' of Metaphysics', *Journal of the History of Philosophy* 59(2), pp. 271–98.
- (2024). 'Hegel's Metametaphysical Antirealism', *International Journal of Philosophical Studies* 32(5), pp. 678–99.
- 山口祐弘. (2019). 『存在の諸相』, 晃洋書房.

A Reconsideration of Hegel's "Conceptual Realism": "Logic" Replacing "Metaphysics"

Shujiro OKAZAKI

This paper reexamines the relationship between Hegelian philosophy and metaphysics from the perspective of "conceptual realism," a position proposed by Robert Stern. Recent advocates of conceptual realism tend to support a metaphysical reading of Hegel, according to which his "Logic" is identified with "metaphysics." This paper clarifies that the framework of "Logic" arises from Hegelian idealism and argues that this idealism is compatible with conceptual realism. This compatibility is explored through the idea that the conceptual has no outer boundary, as articulated by Robert Brandom and John McDowell.

To develop this argument, the paper investigates the differences between Brandom's and McDowell's views concerning this idea in three stages. First, it reconstructs the divergent orientations of their respective versions of conceptual realism, showing that Brandom's view tends toward holistic idealism, while McDowell's leans toward a form of realism grounded in apperception. Second, it argues that this theoretical divergence is reflected in their interpretations of the "Self-Consciousness" chapter of the *Phenomenology of Spirit*, particularly in the differing emphases on the idealism-bearing "I" and the "Self" associated with a realist orientation rooted in immediate knowledge. Third, the discussion returns to the framework of "speculative propositions" in the *Phenomenology of Spirit*, proposing that the apparent contrast between these perspectives can be understood within a single proposition. On this reading, the mediating "I" accounts for the formal coherence of the predicates, while the "Self" grounded in direct knowledge conveys the content of the subject through subject-object identity.

In conclusion, the paper argues that Hegelian idealism, understood as the claim that the conceptual has no outer boundary, ultimately shares its aim with realism grounded in direct knowledge. However, unlike such realism, Hegelian idealism does not remain fixed within a single conceptual content. Instead, it articulates the subject's content through a plurality of formally coherent predicates while continually returning to that content. It is through this inseparable relationship between content and form, and through the self-movement of concepts that expand and contract between world-directed articulation and apperceptive subjectivity, that metaphysical reality becomes dynamically incorporated into the logical structure of Hegel's speculative proposition.